

Teaching Portfolio

2016



第 14 回 佐賀大学 ティーチング・ポートフォリオ・ワークショップ

2016 年 3 月 4 日(金)～6 日(日)

FIT セミナーハウス(湯布院)

立命館アジア太平洋大学 教育開発・学修支援センター

五十峰 聖

sisomine@apu.ac.jp

内容

1. 教育の責任	2
1.1 言語教育センターにおける教育責任	2
1.2 教育開発・学修支援センターの初年次度教育科目に関する責任	2
1.2.1 担当科目	2
1.2.2 スーパーグローバル大学創成支援 (SGU) に関する責任	2
1.3 Educational Testing Services (ETS)公認 TOEFL トレーナーとしての責任	3
2. 教育の理念	3
2.1 大学の教育ビジョン	3
2.2 教育者としての理念	4
2.2.1 ラーニング・コミュニティ	4
2.2.2 ピアラーニング	5
2.2.3 異文化理解	5
2.2.4 英語教育に対する理念	5
2.2.5 自律的学習態度	6
3. 教育の方法	6
3.1 寮におけるプログラムの充実	6
3.2 ピアラーニング	6
3.3 交流授業の活用	7
3.4 授業内でのテスト対策	7
3.5 マルチメディアの活用	7
3.6 Learning Management System(LMS)の活用	7
3.7 学生の個性を活かす	8
4. 教育の成果・評価	8
4.1 授業評価アンケート	8
4.2 授業成果	9
5. 今後の目標	10
5.1 短期目標	10
5.2 長期目標	10
6. 添付資料・参考資料	10

1. 教育の責任

私は立命館アジア太平洋大学(大分県別府市)において、2016年3月まで言語教育センター教員として英語科目を担当していたが、2016年4月より同学教育開発・学修支援センターの准教授に任命された。この役職に置ける最大の責任は、本学のスーパーグローバル大学創成支援(SGU)の業務を遂行すると同時に、教育開発・学修支援センターの初年次教育科目を教えることである。また兼務として米国教育団体の Educational Testing Services (ETS)の公認 TOEFL トレーナーとして、2012年より国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部と連携して、日本全国における教員や学生を対象とした英語四技能向上に関するワークショップを行っている。

1.1 言語教育センターにおける教育責任

2012年9月より3年半、必修英語科目を担当した。使用言語は原則として英語のみだが、生徒のレベルや扱うトピックによっては日本語も交えて、理解度を優先した。基本的にAクラスはリスニング・スピーキング・ライティングを中心に扱い、Bクラスはリーディングや語彙習得中心となっている。どのレベルにおいても共通シラバスを使用し、テスト範囲や進度などをセンター内で均一になるよう調整した(添付資料【1】参照)。また主な担当科目は添付資料【2】に記した。

1.2 教育開発・学修支援センターの初年次度教育科目に関する責任

1.2.1 担当科目

2016年4月より所属先する教育開発・学修支援センターでは、初年次度教育の科目を担当することとなる。年間12コマの担当を予定しており、主な担当科目と概要は以下の通りである。

a) 新入生ワークショップ

新入生の高校から大学への円滑な移行を支援することを目的とし、生活面においては、大学生活への適応を、学習面においては、大学での学びに必要な不可欠となる能動的学修態度とアカデミック・スキル(情報リテラシー、リーディング、ライティング、プレゼンテーション)などの獲得を図る。

b) APU 入門

本学の設立理念および創立の歴史を学び、APU生としての自覚を持ち、APUで学び生活するための仕組みを理解し、多文化環境で経験できる事柄を学習していく。

c) ピアリーダーシップトレーニング

Resident Assistant (RA)や Teaching Assistant (TA)など、学内の様々な場面において活躍する、リーダーとなるうる学生達を対象とした、リーダーシップ養成講座。

1.2.2 スーパーグローバル大学創成支援 (SGU) に関する責任

担当科目以外に、学習支援センター内でSGUの担当業務を担うこととなった。私の最大の任務としては、スーパーグローバル大学等事業構想調書に掲げられた業務のうちの1つである、寮生活を基盤としたオナーズプログラムを構築し、2016年度後期から発足させ、継続して運営していくことにな

る。一般的なオーナーはアカデミックオーナーズ、つまり成績優秀者による学術エリート養成プログラムとしての認識が高い。しかし APU が目指すオーナーは「世界市民育成」を視野にいれたものである。つまり特別意識を持った一部のエリートではなく、キャンパス全体や地域、ひいては世界各地において奉仕・還元できるような、「協働」の理念を持ったリーダーの育成を目標とする。私の業務としては、プログラムの構築・運営にあたって教務課、学生課、アドミッションズ・オフィス(国内・国外)など学内の様々な関連部署と連携を密にし、全学挙げての支援体制を築くことにある。

1.3 Educational Testing Services (ETS)公認 TOEFL トレーナーとしての責任

実践的英語指導の一環として、ETS 本部(アメリカ・ニュージャージー州)で研修を受け、2012 年 9 月より ETS 公認 TOEFL トレーナーとして活動している。日本国内で教育関係者、大学生、高校生と対象とした、TOEFL やアカデミックイングリッシュに関するセミナーやワークショップを行っている。英語四技能の重要性、特に日本人学習者の弱点とされているアウトプットスキル(スピーキングとライティング)の向上、また教育者の指導法改善などを説いて廻っている。大学本務との兼務であるため、主に週末や季節休みの時期に活動する。主な活動実績・内容は添付資料【3】に記した。

2. 教育の理念

2.1 大学の教育ビジョン

1.2.2 で述べたように、私の職位は SGU という特定の目標と理念に乗っ取った業務を遂行することが要求されている。よってまずは大学がどのような理念を持っているかを明確する必要がある。本学では「APU 2030 ビジョン」を打ち出し、今後育成すべき学生像を示している。

APU で育つ「世界を変える」人とは

- ・ 他者と協働し、対話を軸に対立を乗り越え、社会に影響を与えることができる。
- ・ 異なる文化との衝突や遭遇したことのない困難への耐性がある。
- ・ 多様な視点やアイデアから、新しい価値を創造することができる。
- ・ 自分自身のゴールを描き、生涯学び成長し続けることができる。

「世界を変える」人を育てるために APU は

- ・ 比類ない多国籍・多文化環境を活かして、世界市民として成長するための学習や活動の機会及び生活環境を提供し、世界に誇るグローバル・ラーニング・コミュニティを創成する。
- ・ 教育・研究の質を絶え間なく向上させ、世界で通用する新たなグローバル・ラーニングの価値を創造する。
- ・ APU の財産である世界中の卒業生や地域社会のステークホルダーとのつながりを深化させ、教育活動や大学運営で協働する。

APU は世界に誇れるグローバル・ラーニングコミュニティを構築し、そこで学んだ人達が世界を変える。

(APU 公式 HP より、<http://www.apu.ac.jp/home/about/content7/>)

2.2 教育者としての理念

私が理想として掲げる学生像とをまとめるとすると、「自己確立した、人間力のある人間」であろう。人間力の定義には、一般的にコミュニケーションスキル、リーダーシップ、公共心、他者を尊重しながらお互いを高め合う力、などが挙げられるが、私が特に学生に望むのは、大学での4年間という、社会に出る前の大切なステップにおいて、自分自身のアイデンティティーを確立して、自分のポテンシャルを見出すために行動を起こす、ということである。

私のこのような理念の形成の根底には、自身が高校生の時に、国内大学進学を目指す周囲とは違って単身アメリカへ学部留学したことがある。当時より、周囲と同じことをやることに疑問を感じた私は、折角の大学という時間を無駄に過ごしたくない、有意義な経験をしたいと考えていた。何の目的もなく、ただ世間体やネームバリューを気にして大学進学するという風潮、つまり長い物に巻かれて安心するという日本の高校生に何らかの反発を感じていた。それであれば、敢えて逆境に身を置き、自分の快適ゾーンから脱出することで、本当の自分が見えてくるのではないかと考えた。

そういった経緯もあり、学生達には是非とも海外留学を経験して欲しいと願っている。できればその際、自分がマイノリティの立場におかれるような環境、例えば白人社会などに身を投じて欲しい。日本に住んでいる限りは、肌の色や社会における地位による大きなディスアドバンテージを感じることはまずない。しかし、海外で自分がマイノリティの立場になると、初めて気が付く社会の矛盾やコミュニケーションの大切さなど、得るものが沢山ある。私自身、自分で選んで行ったアメリカだが、楽しい事ばかりではなく、白人社会の中で偏見や差別など大変辛い思いをした。それと同時に、日本人というマイノリティでも努力次第では結果を出すことができ、それによって認められ、社会に受け入れられることができるということ、身をもって体験した。このような体験をすると、必然的に異文化に対する許容姿勢が広がり、自身の器が大きくなる。この喜びは非常にかけがえのないものとなり、現在に至るまで私自身の生き方、そして学生と接する際の教育的理念の形成にとって大きな影響を及ぼしてきた。

従って学生達には、安定した既存路線から脱出し、大学生という多感な時期だからこそ、慣れ親しんだ環境以外の場所で、自分自身のことに気が付くチャンスをも自分で与えてほしいと願う。自分で行動を起こして、長所も短所も含めて自分のことを理解しようとする事は、自分の自信へと繋がる。そしてその自信があれば、卒業して社会に出てからも、どのような状況においても実力を発揮できる耐性がつくはずなのだ。そして30歳、40歳になっても、変わっていく自分に気づいていくであろう。そのためにもまずは、自分とはどういう人間なのか、どういうポテンシャルを秘めているのか、そのためには何をしたいのか、を探すきっかけを在学中に是非とも見つけてほしい。と切に願ってやまない。

2.2.1 ラーニング・コミュニティ

大学教育において私が重要視する理念に、寮生活を基盤とするラーニング・コミュニティの形成がある。これは私が以前にアメリカで大学職員として働いていた時に培った考えである。当時は学生部寮生活課(Residence Life)の職員として、Resident Director(RD)の職位についていた。これは寮一棟の運営全般の責任者でもあり、多種多様な人種、境遇、信条を持った学生達の共同生活を支援する立場であった。

寮生活は、ただ同じ住居環境を共有するだけでなく、学びの場で環境でもあることも強調したい。学生達は共同のルールを守るということを学ぶだけではなく、日常生活で生じる様々な問題(騒音、生活時間帯の違い、価値観や習慣の違い、等)を認識し、報告し、話し合っ問題解決を目指すというプロセスを経ることで、コミュニケーション能力や問題解決スキルの向上が期待できる。また上級生や Resident Assistant (RA)と呼ばれる学生スタッフは、下級生に対してアドバイスを送ったり、悩みを聞いたりすることで、コミュニティ内における自分のリーダーシップを発達させることができる。このような実践的なラーニング・コミュニティを最大限に活用することで、学生達はお互いからより深く学び、有益な経験を共有し、教室では学ぶことのできない、実践的なコミュニケーションスキルや問題解決能力という、大学教育に更なる付加価値を見出していくのだ。

APU においても多くの国内・国際学生が生活する寮を中心としたラーニング・コミュニティの重要性は認識されている。SGU の目標の1つである「新入生寮活用100%」の達成を今後目指す上で、私の経験と理念を更に役立てたい。

2.2.2 ピアラーニング

学習面においては、ピアラーニングの有効性を以前から強調している。教員から一方的に学ぶのではなく、学習者同志がお互いに弱点を補強しながら学ぶスタイルである。お互いが教える役割を担うことで、教わる生徒はもちろん、教える側の知識の定着も強化できる。お互いに判らないことは、第三者に尋ねたり、他の情報源を調べてきたりなど、共同で作業をすることにつながる。これは APU2030 ビジョンで掲げられている「協働」の理念に沿ったものであり、そのような学生スタイルを引き続き教室内外で奨励していく。

2.2.3 異文化理解

国際的視野を持つ学生になるためには、異文化に対する許容範囲を広げる必要がある。メディアの情報だけに振り回されずに、自身が持っている先入観を捨て、積極的に自らの体験をもってして異文化に対する理解を深めることが必要である。しかし異文化の全てを受け入れなくてはならない、という事ではない。例えばルームメイトとは人種、価値観、宗教、信条などが違っていても、まず違いがあるということを客観的に認識して受け入れることが重要だ。さらには、相違点を乗り越えて共存できるよう、共通点や妥協点を見出そうとする姿勢が、今後の多国籍社会で活躍していく上で必要不可欠である。

2.2.4 英語教育に対する理念

私の日本の大学における、約13年間の英語教育において一貫して強調してきたのが、「英語はツールである」ということだ。その先に何か表現したいこと、理解したい事などがあり、それを達成する手段として英語のスキルを磨きなさい、と繰り返し教えてきた。TOEIC や TOEFL のスコアを取ることも自体が目的ではなく、英語で何かを理解したり達成したりすることが重要であるので、そのために必要な英語スキルを身に付けるよう、促してきた。

何をしたいかは各学生によって違うのであり、またそれを探求するために大学に来るのだ。海外に興味のない学生でも、今の時代日本文化を海外に発信することは日常であるし、東京オリンピックなどによって来日する外国人達に対応できなくてはならないシチュエーションが益々増えるであろう。そういう時代だからこそ、必要に応じた英語スキルを兼ね備えておくということが、世界市民としての今後のスタート地点であると考えます。

また英語学習の過程で様々な場面で有益なスキルを身に付けることができる。例えば自分の意見を明確に伝え、更に論拠を用いて説得力を持たせるスキルであったり、プレゼンテーションなどのパブリックスピーキングスキルであったり、エッセイを書く上で英語文献をリサーチする能力であったりなど、どれも英語以外の場面でも役に立つスキルである。

2.2.5 自律的学習態度

教科を問わず、自律的な学習態度を確立させることは大学生にとって必須である。言われたことを闇雲にこなすだけではなく、授業で何が求められているのかを自ら明確にし、必要であれば教員に質問し、授業進度を確認し、欠席の場合の連絡、またそのフォローアップを自ら行うなどの、自己管理と責任能力が問われる。これらは社会人になるための必要準備と捉えるべきである。

3. 教育の方法

3.1 寮におけるプログラムの充実

2.2.1 で述べたようなラーニング・コミュニティ意識を定着させるためにルームメイトやフロアメイト間の交流を促進する様々な社会的、文化的、教育的なプログラムを導入してきた。APU においてはまだ本格的な寮生活の指導を試みていないのだが、実験的に寮で行うような問題解決アクティビティを授業中に取り入れてみた(添付資料【4】)。

学習プログラムという面では、通常の教室で授業を行う代わりに、学生寮の中にあるミーティングルームも頻繁に授業用として活用した。この環境の変化によって、より身近な生活に近い環境で、仲間と共同学習するというモチベーションづけを促した。

3.2 ピアラーニング

2.2.2 で述べたように、ピアラーニングは言語教育やその他の科目においても非常に有効である。私がクラス内で実践しているピアラーニングの手法の例は以下の通りである。

- ・授業の最初に簡単なアイスブレイカーから始める。通常はペアまたはトリオで、簡単なトピックを与えてディスカッションから始める。時間を決めて新しいパートナーと交代する。また徐々にトピックの難易度を上げていく。

例:トピック1「母親または父親の料理で何が一番好きか」

→トピック5「政府は、劇場や美術館の建設を、税金を使って支援すべきか」

- ・ディスカッションがスムーズに行くための補足であれば、日本語使用も許可した。それにより、英語にしづらい日本語を、パートナーが英語で説明する、など、協働を促すことができる。
- ・リーディングなどの作業は、グループごとに着席させるスタイル(アイランド形式)をとった。こ

れにより重要点の確認などをグループ内でのピア・ティーチングを促した。

- ・学生用のフィードバック用紙を作製し、エッセイを提出する前にピアフィードバックを行う。文法やワードチョイスといった項目はだけでなく、論理展開や詳細の補足など、客観的な視点でアドバイスをお互いに送るステップを授業に盛り込むようにした。

3.3 交流授業の活用

2.2.3 で挙げたような国際交流を促進するために、毎学期2回の交流授業を行ってきた。これは私が担当する英語クラスと、日本語教員が担当する日本語クラスとの合同授業であり、45分間は英語だけ使用し、残りの45分は日本語だけ、というルール設定をする。教員はそれぞれ交流授業の中で行いたいアクティビティやタスクを事前に考案し、両クラスに対して指示をだす。以下は幾つかの例である。

- ・スマートフォンや PC で写真や動画を見せながら、お互いのホームタウンを紹介する。
- ・日本人学生の英語プレゼンの練習を国際学生に聴いてもらい、フィードバックを受ける。
- ・国際学生が、日本特有の習慣やマナーについて質問する。
- ・シナリオを配り、混合グループで問題の解決策を話し合い、最後に発表する。

3.4 授業内でのテスト対策

英語テストのスコアを目指すことだけが目的ではないが、大学で設定された目標スコアをクリアできるよう指導することも重要である。準上級英語 B クラスにおいては、成績の 30%が学内義務受験の TOEFL ITP のスコアが考慮される。500 点以上であれば 30%、それ未満は部分点として可算される。これによって、留学希望者もそうでない学生も TOEFL の勉強が必要となり、シラバスにも TOEFL 演習の時間を組み込んだ。指定の教材以外にも TOEFL 準備に役立つ教材を随時授業内で配り使用した。

3.5 マルチメディアの活用

英語に興味を持たせ、継続して自主的に学習することを促すために、動画を使用した課題などを課した(添付資料【5】)。授業中に英単語の類義語を検索させるのにスマートフォンを使い、付属する音楽プレイヤーの活用を奨励した。特にリスニングやスピーキングに関しては、常日頃から音声に慣れ親しめるよう、音源を各自でダウンロードさせ、効率的に練習できることを指示した。また学内にある自主学习センター(SALC = Self-Access Learning Center)の活用を勧め、イベントやチューターに関する情報をクラス内で共有した。

3.6 Learning Management System(LMS)の活用

2.2.5 で述べたような自律的学習態度を引き出すために、学習ツールを有効的に活用した Blackboard を使用し、課題の配布、連絡事項、課題提出などを管理した。リスニングなど音声教材を使用する場合には LMS にアップロードし、各自でダウンロードする指示を出した。これにより欠席

した学生でも授業内容を確認するよう、自己責任・管理の必要性を訴えた。

またエッセイ課題については、教員が時間を割いてコメントをしても、それを学生が上手に活用できていない、もしくはコメントそのものを読んでいないという事例が多くあった。その対策として、初稿の段階では Google Docs も使い、フィードバック機能を確実に活用できるようにした。この機能により、学生がコメントを読んだか否かをチェックすることができた。また最終稿の提出の前には、Blackboard にエッセイを各自でアップロードさせ、組み込まれている剽窃探知機能 (Turnitin) を利用することで、適切な引用をせずに無断転載している部分を学生に把握させた。

3.7 学生の個性を活かす

日本人学生の間でも、出身や海外経験など様々な背景の学生がいることを踏まえ、毎学期2つ提出する英文エッセイのトピックは、各自が最も興味のあることを自主的に選ばせた。例えばボランティアサークルに属する学生は、その活動を通して学んだフィリピンの貧困問題を扱ったり、実家が農家である学生は遺伝子組み換え農産物の問題点を選んだり、などがみられた。各自の経験や価値観によって、いろいろな形でクラスに貢献できるということを認識させた。

4. 教育の成果・評価

4.1 授業評価アンケート

毎学期末に行われる学生対象の授業評価アンケートは、大きく分けて以下の項目に分かれる。

- a) 学習言語の使用頻度
- b) 宿題や予習など、授業外での学習時間
- c) 学習言語の向上に役に立ったこと
- d) 学修言語を継続して勉強したいか
- e) コースや教材のレベルや満足度
- f) 教員の指導に対する満足度

アンケート結果によると、教員の指導に対する全体的な満足度は、概ね 80%程度と、比較的高いようである。参考資料として 2014 年秋学期と 2015 年春学期の授業評価アンケートの一部を添付資料【6】に載せた(表 1, 表 2)。

また、主に学生のエッセイに対して行うフィードバックの満足度においても、「強くそう思う」「そう思う」の回答が合計で 80%以上と、概ね満足していることがうかがえる(同、表 3、表 4)。

最後に、クラス内で随時取り入れたペア・グループワークに関しても、学生は学力の向上において有益だと感じていることが判った(同、表 5、表 6)。特筆すべき点は、ペア・グループワークの評価と同じぐらいに教員の説明も評価されている、という点だ。ここから推測できるのは授業内での教員の説明と、課題に対するフィードバックの両方が補足し合う形で生徒の満足度につながっているのではということだ。

4.2 授業成果

<ピアラーニング>

一番明らかな成果として判ったのが、習慣としてペア・グループワークが定着したという事だ。私から指示をしなくても、ペアやグループ学習を行って、積極的にクラス内で助け合う姿勢が日常に。またグループ内でのコミュニケーションも活発になり、学期当初は大人しく、ただ黙っていたような学生が、学期が進むにつれ減った。それ以外にも、クラスの生徒同士で SNS を使った連絡網を自主的に作って連絡をとりあうなど、協調して努力する姿が見られた。

<TOEFL スコア>

TOEFL 対策の成果としては、担当した学生 58 名のうち、44%にあたる 26 名が目標点である 500 点をクリアし、成績の 30%をフルに獲得することができた。またそれらの学生の多くは、学内交換留学に決定または内定することができたようだ。また 500 点に届かなかった学生でも、約 30%にあたる 17 名が部分点を得た。合計すると、約 75%近くの学生において TOEFL スコアの改善がみられたということになる(添付資料【7】参照)。

<リーダーシップ>

また授業の直接的な効果とは言い切れないが、それ以外にもキャンパス内におけるリーダー的な役割(TA、ボランティア、RA、サークル代表など)を担う受講生があちこちで見られた。英語学習に対する積極的な姿勢が、課外活動においても良い影響を及ぼしたのではないだろうか。

英語プログラム全体の成果としては、学内の交換留学プログラムへの応募数が増え、更にそれ以外の自主的な海外活動(休学しての海外渡航、海外インターン等)への参加も増えたとの報告があった。

<英語文化への親しみ>

また、それまで J-Pop アイドルしか興味のなかった学生が、洋楽を進んで聞くようになったなど、スポーツ、音楽、芸能などの趣味の面においても、英語を介して海外文化により興味を持つ学生が増えたようだ。一人の学生から「毎週月曜日か金曜日にやるハッピーリスニング。あまり洋楽を知らなかったので楽しかったし、回を重ねるごとに、段々と聞き取れるようになっていくのがうれしかった。」とのコメントを貰った(ハッピーリスニングとは、洋楽を使った聞きとりアクティビティのことを指す)。

<交流授業>

日本語クラスとの交流授業に関しては、「もっと回数を増やしてほしい」という趣旨のコメントが複数寄せられるなど、生徒たちが楽しみにしていたことが伺える。授業の進行状況や日程調整などにより、さほど頻繁にできないのが残念だが、そのような交流の場を学生自身が重要と捉えているのは、非常に有意義であると感じた。

5. 今後の目標

5.1 短期目標

- ・2016 年 4 月より、アクティブラーニングをより積極的に取り入れた、日英両方のワークショップ授業を有効的に行う。またベテラン教員の授業を観察し、クラス運営の手法を向上させる。
- ・SGU 業務として、オナーズプログラムの構築に尽力する。またそのプログラム開発に充分時間を割く。2016 年秋学期からの運用を目指す。
- ・RA トレーニングに継続的に参加し、適宜アドバイスを送ると同時に、プログラムメニューの改善点を提案していく。それによって寮生活のクオリティ向上に努める。
- ・上記の内容に関する論文発表を行う(5 年以内に 3 本程度)。
- ・日本国内各地においての、英語四技能指導に関する講演やワークショップを行う。

5.2 長期目標

- ・寮生活を基盤とするリーダー育成のプログラムの運営を責任者となり、それに関する学会発表・執筆などを行う。
- ・交換留学、ジョイントプログラムなどの企画・運営に携わる。
- ・アメリカ文化・歴史のテーマでの講義、ゼミを担当する。

6. 添付資料・参考資料

- (1) 準上級英語 A シラバス
- (2) 言語教育センターでの担当科目一覧
- (3) TOEFL セミナー・ワークショップ業績一覧
- (4) 問題解決アクティビティ例
- (5) 映像を用いた課題例
- (6) 授業評価アンケート
- (7) TOEFL スコア